

第三期中長期計画研究プロジェクトの事後評価結果概要

I. 第三期中長期計画研究プロジェクトの事後評価について	P. 2
II. 学識経験者による第三期中長期計画研究プロジェクトの 事後評価結果概要	P. 3
III. 事後評価結果を受けての対応	P. 12

I. 第三期中長期計画研究プロジェクトの事後評価について

NIMS では、第4期科学技術基本計画をふまえて、第三期中長期目標期間（平成23年度～27年度）において、物質・材料科学技術に関する基礎研究及び基盤的研究開発の成果を、環境・エネルギー・資源問題の解決、産業競争力強化等の社会的課題への対応に向けて還元していくことを目標とした。これに基づき、運営費交付金によって取り組むべき重点研究開発領域を、「新物質・新材料の創製に向けたブレークスルーを目指す横断的先端研究開発の推進」と「社会的ニーズに応える材料の高度化のための研究開発の推進」の二つとした。前者においては、「先端的共通技術領域」（5プロジェクト）と「ナノスケール材料領域」（4プロジェクト）を、後者においては「環境・エネルギー・資源材料領域」（10プロジェクト）を設定し、合計19プロジェクトを平成23年度から開始することとした。その後、平成23年3月11日に起こった東日本大震災に伴う大きな情勢変化を踏まえ、NIMS では第三期中長期目標及び中長期計画の見直しが行われ、平成23年度から開始した19プロジェクトに加え、平成24年度から新たに1プロジェクト（「社会インフラの復旧、再生に向けた構造材料技術の開発」）が開始された。

これらの20プロジェクトはいずれも平成28年3月31日で終了した。NIMS の課題評価実施要領では、運営費交付金で行われたプロジェクトは終了後のできるだけ早い時期に事後評価を行うことになっており、プロジェクト終了直後から準備を始め、平成28年12月～平成29年2月に事後評価を実施した。

以下、学識経験者による第三期中長期計画研究プロジェクトの事後評価結果の概要について述べる。

Ⅱ. 学識経験者による第三期中長期計画研究プロジェクトの 事後評価結果概要

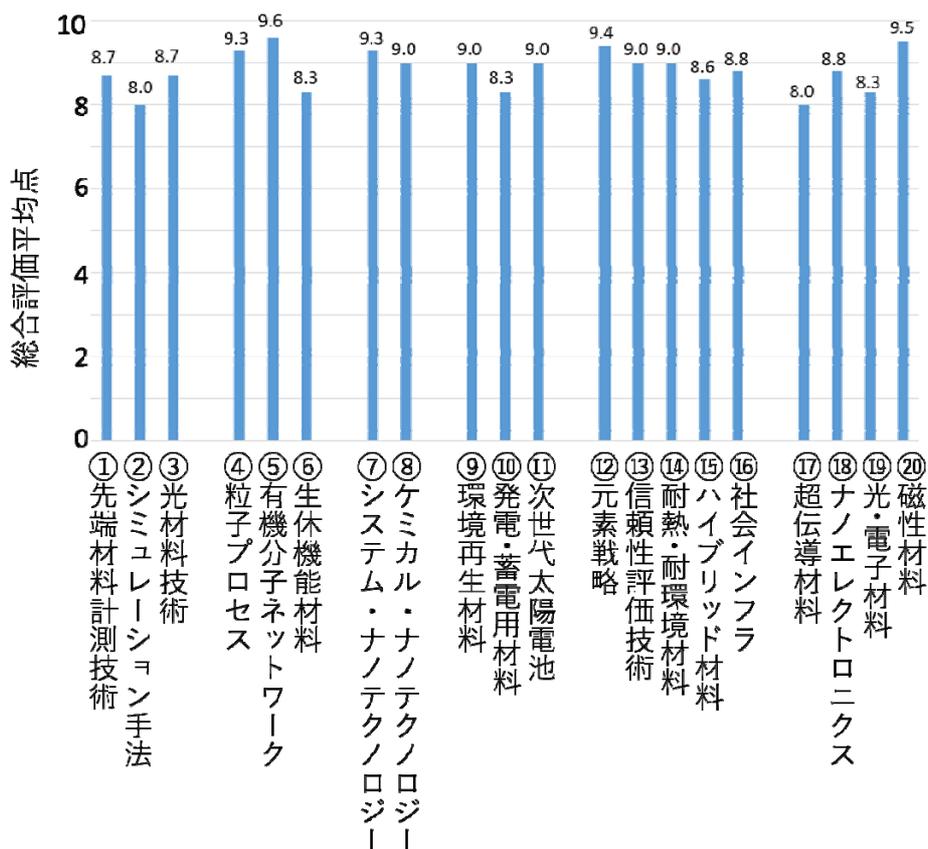
1. 評価方法

学識経験者による20プロジェクトの事後評価を、研究終了後の平成28年12月から平成29年2月にかけて実施した（「第三期中長期計画研究プロジェクトの事後評価委員会（学識経験者、スケジュールと構成）」参照）。事後評価は、研究領域を考慮し比較的類似した2～5プロジェクトを6つのグループ（主に先端的共通技術領域の2グループ、ナノスケール材料領域の1グループ、主に環境・エネルギー・資源材料領域の3グループ）に分けてグループごとに行った。評価委員は課題評価実施要領に基づき、グループ毎に3～5名の利害関係のない当該分野の学識経験者に依頼し、グループの評価委員のうち少なくとも一人は過去のプロジェクト評価作業に携わった経験のある専門家とした。事後評価に携わった評価委員は合計21名（所属内訳：大学関係17名、公的研究機関関係1名、民間会社・研究所関係3名）であった。事後評価は、①研究計画、実施体制、マネジメント、連携、②プロジェクトの具体的な達成度、③研究開発の進捗状況、④見込まれる直接の成果（アウトプット）、効果・効用（アウトカム）、波及効果（インパクト）、及び総合評価点で、さらに⑤その他として研究全体に対する総合的な所見の観点で行った。

2. 20プロジェクトの事後評価結果

20プロジェクトの事後評価結果の総合評価点平均値を次ページの図に示す。評価委員からの総合評価点平均は、いずれのグループのプロジェクトも8点以上であった。

事後評価結果



以下に、第三期中長期計画研究プロジェクトに対する、事後評価委員からの主なコメントを記す。

「①先端材料計測技術の開発と応用」：

- ・表面から内部に至る構造と特性を高精度に解析する充実した設備と人的資源を有している。
- ・それぞれの計測技術は、世界一級、かつ独創性の高いものを開発されており、2011年の災害を乗り越え、これらを成し遂げられたことに敬意を表する。
- ・最表面敏感スピン計測法の開発では、2次元物質のスピン트로ニクス応用への展開が期待される。ただし、中性子の利用は、日本全体の問題があるように思われるので、NIMSが中心の1つとなって中性子を利用した物質研究を牽引してほしい。
- ・開発された各種の先端計測技術が、文科省微細構造解析プラットフォームなどへも共有・活用されることで、国内の物質・材料の技術開発レベルの促進に貢献し、国際競争力を向上するものと期待される。
- ・各サブテーマで開発された最先端材料計測技術を組み合わせた複合的な計測とデータ解析法の開発による世界をリードする新展開を期待する。

「②新物質設計シミュレーション手法の研究開発」：

- ・オーダーN法第一原理計算手法の開発とその実装における計算の高精度化および高効率化は、今後の複合デバイス、高分子、複雑な反応系への拡張にも期待が持たれ、学術的価値も高い。
- ・光誘起トポロジカル絶縁体相の発現の理論的同定および磁性体におけるトポロジカル相の同定の成果は、世界的にも優れたものであり、スピン트로ニクス分野における応用展開にも期待が持たれる。

- ・新規2次元物質の可能性が理論的に示されたことで、論文の引用数も100を超えるなどの効果が現れている。
- ・勝負する方向を定めて特徴のある成果を創出しているが、選択と集中の判断がこのグループの今後を決定すると思われる。

「③革新的光材料技術の開発と応用」：

- ・一部サブテーマの統合による効率化および新たなサブテーマの設定による独自技術の展開を図るなど、実施体制の再編、マネージメントの工夫がなされ、ロードマップの策定も適切に行われている。
- ・液滴エピタキシー法による量子ドットの作製技術において、質の高い量子状態の制御が可能となりつつあり、学術的にも価値の高い成果が得られている。
- ・光ディラックコーンの生成条件の解明や電子波への拡張などの成果は、学術的にも大きな意義がある。
- ・プロジェクト期間の途中からロードマップに追加された革新的導波路構造については、短期間に多くの成果が得られている。
- ・ベンチャー企業設立に代表されるように新産業への意欲的挑戦があり波及効果は大きいと思われる。
- ・この分野は先端的解析技術をものづくりに生かしやすい分野と思うので、ぜひ連携して「学問を産業の道場」とした展開を引き続き見せてほしい。

「④新材料創出を可能にする粒子プロセスの開発と応用」：

- ・国内外の研究機関や民間企業との連携・共同研究も積極的に行われ、多くの成果に繋がっている。ただし、内部研究者が筆頭著者の高IFジャーナル掲載論文が少なく、連携先からの論文に若干頼っている印象を持つ。
- ・原理を公開しているにも関わらず他の機関では実現できないなどオンリーワンの成果と言える。
- ・世界的にユニークな蛍光体の開発が次世代蛍光体イノベーションセンター（ICAP）の設立に繋がったことは、特筆に値する。
- ・フラレンナノワイヤ、ナノシート等の新しいナノカーボン材料、層状カルコゲン化合物（TMDC）、六方晶窒化ホウ素（hBN）などの2Dナノ材料の研究が進んでおり、将来は超伝導体、太陽電池、光・電子デバイス等への応用につながる波及効果の大きな成果が上がっている。
- ・高次構造制御といっても次元性を下げた1D、2D構造を制御する方向に行っているが、全体として「粒子プロセス工学」としてまとまった体系ができつつある。

「⑤有機分子ネットワークによる材料創製技術」：

- ・国内外との共同研究が積極的に行われ、また研究目標を明確にしながら、良好なマネージメントが実施されている。
- ・DLC（ダイヤモンド状カーボン）製濾過フィルター、高分子メソ多孔体、各種光・電子機能を持つポリマーなどの合成・製造に関する成果が多く上がっており、デバイス応用の技術も着実に向上している。
- ・有機分子のネットワークに基づく機能創製に特徴がある研究であり、世界レベルの成果であると評価できる。
- ・今回得られた基礎研究成果を種にして、今後さらに応用研究、実用化研究へ展開して真に使える材料

の開発に結び付けて行かれることを期待する。

- ・有機分子だけでなく、金属原子を含むMOF (metal-organic framework) も分子ネットワーク材料の仲間に入れて、今後検討を進めると更に広がると思われる。

「⑥ナノバイオテクノロジーによる革新的生体機能材料の創出」：

- ・企業や医学部との共同研究が積極的に行われ、良好なマネジメントが実施されている。
- ・材料の特性を利用した治療に関する成果は高い社会的価値につながる可能性がある。
- ・将来社会的価値の創造や医療技術の向上に繋がる材料開発ができたと言える。
- ・多孔性レシチン粒子、ナノファイバーメッシュ材料、疎水化ゼラチン多孔膜、3次元マイクロパターン化材料など新しい材料の創製に成功しており、将来の医療応用の芽を開発している。
- ・サブテーマ間で温度差が認められるが、全体として質の高い論文の数が少ない印象を受ける。ただ、医療応用に資する実用材料を開発するという明確な目標があり、魔の川渡河型研究や応用研究に力が置かれているので致し方ないと思われる。
- ・いくつかの新しい材料を開発されたが、それらを総合して材料セラピーをやるためにどんな材料をどう構築していくかという設計戦略を築いてほしい。

「⑦システム・ナノテクノロジーによる材料の機能創出」：

- ・研究課題においては、ナノテクノロジーの研究の中で新たなナノアーキテクトロニクス概念のもと、単に世界でよく行われているナノテクノロジー、ナノサイエンスにとどまらずその上位概念であるナノ構造、材料に機能を持たせようとする新たな概念で、NIMSに置かれた人材と環境の中で最大限に力を発揮できる課題選択となっている。
- ・従来のFETを想定したスイッチの概念とは全く異なって、アトムスイッチはきわめてオリジナリティの高いものであり、それを、NECを通して産業化まで持って行ったことは高く評価される。
- ・本研究の予算は新たに提案されたシステムナノテクノロジーによるナノ材料の機能創出という、ナノテクノロジーのしかるべき次のステップを的確に捉えたプロジェクトにおいて、そのやるべき項目の重要性と多さの中でNIMSが持ちうる人材と施設を最大限生かした研究計画と実施体制となっており、それを実現する努力の跡が見て取れる。
- ・年100件以上（全571件）の招待講演、Nat. Mater. など年100編程度（全487編）の高レベルの発表論文、特許約150件、受賞約40件は、世界的にも高水準で卓越した成果と言える。
- ・総合的に極めて優れた成果が得られており、NIMSを代表するプロジェクトといえる。

「⑧ケミカル・ナノテクノロジーによる新材料・新機能の創出」：

- ・中間評価でのコメントをふまえて応用にも十分目配りされた展開がなされ、極めて高いレベルの成果を挙げている。
- ・目的とする数値を超えた機能材料の開発が進み、Cs検出試薬の実用化、誘電体ナノ薄膜の企業との共同研究の開始など、研究成果が社会に還元されるとともに、経済価値の創出についても、今後、十分な展開が期待できる。
- ・得られている成果は世界的レベルに比較してトップレベルに十分行っており、高い評価が与えられると考えられる。

- ・上記のように研究開発は世界トップレベルであり、予算額からは到底不可能とも思える質量ともに非常に優れた成果が得られている。
- ・ナノシートに関する研究を中心に高誘電体シートの発見、DDS、セシウム検出試薬等の開発等多くの応用可能性を見いだしてきた。
- ・今後、同様の機能材料開発に加え、これまでに得られた成果を基にメソ領域へと展開することで、材料自体の新しい特性開発に加え、システムとしての新規機能の発現も期待できる。

「⑨次世代環境再生材料の研究開発」：

- ・物性理論研究、材料合成、材料評価が融合された研究計画で、研究成果からみても、高く評価できる。
- ・放射性物質の吸着・除去技術の開発と関連基礎研究は、原発事故後の対策という意味だけでなく、将来の安全安心な社会の構築に向けた基盤となる社会的価値がある。
- ・自動車排ガス清浄化触媒など、社会へのインパクトのある芽が出ているものもあるが、完成度が低い状況であり、企業との連携を含め、実用化に向けた集中化が必要に思う。
- ・今後は、実用化に向けた展開が必要であり、産学連携を含めて、課題の明確化と実用化計画の策定が必要であろう。
- ・影響力の大きな国際学術雑誌に多数の論文が掲載されており、極めて水準の高い優れた成果が得られている。
- ・今後の材料研究では、計算科学の占める役割が大きくなる。表面や界面での物質やそれらを構成する電子の挙動は、バルク材料中とは大きく異なり、未だこれらの反応に関する計算科学の十分な学理が確立されたとは言い難い。本プロジェクトの成果や今後のさらなる検討を通じて、この点の確立に資する形に繋げることができると、本プロジェクトの価値がさらに高いものになると思われる。

「⑩高性能発電・蓄電用材料の研究開発」：

- ・独自シーズを基に、材料特性の解析・改善、デバイス化に向けたプロセス開発、および各種評価を行うロードマップに問題はなく、CO₂削減に寄与するエネルギー貯蔵・変換デバイスの開発が進められた。
- ・a-Si負極と組み合わせた高エネルギー密度の全固体リチウム電池、電解質膜と界面抵抗を抑えた高温固体高分子燃料電池、水素製造用Ni基ハニカム構造触媒、MgSi系化合物熱電材料など、新材料の研究開発で、学術的にも高い成果が得られ、評価できる。
- ・得られた成果の特性数値は、いずれも世界レベルと同等あるいはそれを超えるものであり、残された課題が解決できれば、近い将来、実用化される可能性が高い。
- ・内容的には材料製造プロセス開発やデバイス特性の改善が多く、それぞれのデバイスに対して一定の成果を上げているが、従前の技術的問題点を根本的に打破し、開発ステージを一段押し上げるような内容は限定的である。潜在的なポテンシャルは十分あると思われるので、今後はその点での成果も期待する。
- ・実用化に向けた研究計画の見直しと研究開発テーマの重点化が必要であろう。ただし、NIMSの目的は実用化ではなく、重要なポイントの研究開発であることを忘れずに進めて頂きたい。

「⑪次世代太陽電池の研究開発」：

- ・ロードマップの変更は適切であり、サブグループ間、特にサブテーマ1（色素増感太陽電池の研究）とサブテーマ2（有機薄膜太陽電池の研究）が効果的に連携することにより、世界に冠たる優れた成果を挙げたことは本プロジェクトにおいて特筆に値する。
- ・色素吸着状態の解析や共増感色素の改良による色素太陽電池の高効率化、ペロブスカイト層のモフォロジー制御や傾斜ヘテロ接合構造の導入によるペロブスカイト太陽電池の高効率化において、いずれも、世界最高効率を2回更新するなど、次世代太陽電池の研究開発で、学術的にも高い成果が得られ、評価できる。
- ・少人数の集団（定年制研究員8名）で、320という高い被引用件数のある論文を含む学術論文229、招待講演171、特許出願20など、高い学術的研究成果が得られている。
- ・色素増感太陽電池や有機薄膜太陽電池の高効率化は難しく、ペロブスカイト太陽電池の研究開発にシフトしたのは妥当と考えられる。
- ・しかし、ペロブスカイト太陽電池の研究開発においても、大面積モジュールでの高効率化、安定性や信頼性向上など、課題は多く、実用化に向けた展開が必要であり、産学連携を含めて、課題の明確化と研究開発計画の再考が必要であろう。

「⑫元素戦略に基づく先進材料技術の研究」：

- ・結晶制御技術を用いて構造材料の開発を行うことは、様々な特性のバランスを取り、新たな材料を短時間に開発できる可能性のあるパワフルな技術であり、これを着実に推し進める研究として高く評価できる。
- ・構造・機能材料の組織形成、物性評価、メカニズムの検討、新規材料の実現、高機能達成など、希少元素に頼らない材料科学・技術の基盤となる先端的成果を生み出している。
- ・プロジェクト全体としては、実に多くの論文発表やプレス発表をしている点は良い。また、多くの基本特許の出願も評価できる。
- ・構造材料では、研究目的において注目した特性のみを比較するのは危険と思われる。たとえばサブテーマ3（最適設計材料強靱化）の強靱鋼は強い方位依存性を有するため、荷重方向によっては低い靱性を示すことが想定できる。健全性を保つために必要な特性は他にも多くあり、これらを開発研究の初期段階から評価し、幅広く材料特性を捉えることが重要と思われる。

「⑬エネルギー関連構造材料の信頼性評価技術の研究開発」：

- ・目的としている「構造材料の実使用環境下におけるクリープ、疲労、水素脆化、応力腐食割れ（SCG）等の動的現象に対する材料信頼性評価技術の開発」は、まさに社会の要請とNIMSの強みに合致したものであり、極めてよいテーマ設定である。
- ・環境強度の評価手法の研究は、これまで実験データベースのものがほとんどであったが、本研究によって高強度鋼のギガサイクル疲労や脆化のメカニズムが解明され、科学的な評価モデルの構築につながっている。
- ・材料損傷の可視化技術によって、高強度鋼のギガサイクル疲労のメカニズムが解明されたことは、世界的にも画期的な成果といえる。
- ・解析・評価に関するプロジェクトでは国内外の規格を提案・確立することが大切で、これら規格立案も十分に行われており、本プロジェクトの波及効果は極めて優れていた。
- ・材料の信頼性評価技術の開発はまさにNIMSのコアとなる取組みであり、引き続き、競争力の維持・強化に努めていただきたい。
- ・試験データの更なる積み重ねを含めて、継続的な研究をお願いしたい。

「⑭低炭素化社会を実現する耐熱・耐環境材料の開発」：

- ・高温用チタン合金、鉄鋼材料の耐熱性を 100℃以上向上させるという挑戦的な目標を掲げ、耐熱材料およびその表面改質と材料設計・シミュレーションを行う 6 つのサブテーマからなるプロジェクトを遂行している。
- ・ポーランドその他の海外大学・機関との学生・若手研究者を通じた連携を活発に行っている点が本プロジェクトの特徴の一つであり、将来の財産になる活動として評価できる。
- ・発電プラント用耐熱鋼、航空機用チタン合金の両研究対象について、耐熱性を 100℃向上させるというプロジェクト目標をほぼ達成する成果が得られていると判断される。
- ・マルテンサイト以外の組織を有する優れた特性の 15Cr フェライト系耐熱鋼、高温クリープ・耐酸化性に優れたチタン合金、高温形状記憶合金、新しい鍛造 Fe-Ni 基超合金の開発、コーティング用耐酸化合金厚膜形成技術の開発など、優れた成果が得られている。
- ・200 件近くの論文発表で研究成果をアピールすると共に 90 件を超える特許創生により今後の国内産業での利用が期待される。
- ・当初の目標は十分達成されているといえるが、構造化への展開のためには、加工性、溶接性の確保、および溶接部も含めた高温強度確保が必須であり、その方向への研究展開が大いに望まれる。

「⑮軽量・高信頼性ハイブリッド材料の研究開発」：

- ・ハイブリッド材料の基礎・基盤技術をターゲットとしていることは、企業とは異なる NIMS で行うべき研究として適切な課題設定であると考えられる。
- ・課題設定に対し、複数の企業ヒアリングを行い、異材接着・接合（ハイブリッド材料）を抽出している点は評価できる。
- ・ハイブリッド材料の創製では、異材界面を制御するプロセス、界面の材料科学、界面メカニクスなどの界面科学が鍵を握り、その学術基盤構築に大きな役割を果たしている。
- ・全体としての物理的性質を制御したハイブリッド三次元構造体の設計・試作や、既存の接合技術の延長線上にない新しい技術としてのバイオミメティクス技術に基づく接合新技術など、新しい研究の芽となる興味深い成果が具体的に得られている。
- ・単に、単一課題設定（目標設定）を行い、数値目標を追うのではなく、開発したツール（要素・基盤）を他の研究者にも役立つようにしている。
- ・構造化技術では接着に視点が当てられているが、より高い強度発現のためには、溶接を組み合わせた構造化技術の開発にも今後取り組まれることを期待する。

「⑯社会インフラの復旧、再生に向けた構造材料技術の開発」：

- ・災害に強い国づくりの実現を目的とした耐震性と耐火性の向上に資する構造材料、溶接補修技術の開発や部材化・大型化の実証は、テーマとして極めて妥当なものである。
- ・各サブテーマの研究目標は、研究期間が 4 年でありながら、達成できていると判断される。特に、耐震ダンパー鋼の疲労寿命目標は 2 倍であったのに対し、目標を大幅に上回る 10 倍が達成され、鋼材とともにその溶接材料が開発されたことは特筆される。
- ・社会インフラ構築に関する研究は大型予算が必要であり、本研究は予算規模に比較して大きな成果をあげていると判断される。
- ・本研究の成果は、論文化というよりも、社会実装度で評価されるもので、実機適用や実用化、手法・技術の特許化などが評価指標となる。
- ・制振鋼が実際の高層ビルディングに適用された実績は、特筆すべき成果である。
- ・学術だけでなく、社会的な要請に見合った、正に国が施策として取り組むべきプロジェクトであった。
- ・また、並列して進められていたプロジェクト間を接着させる良いプロジェクトであった。

「⑰先端超伝導材料に関する研究」：

- ・中間報告で指摘された関連の強いサブテーマ間の連携について、特にサブテーマ 1（物質開発と基礎物性評価）、2（電子構造解析と超伝導メカニズム解明）、3（超伝導磁束量子ダイナミクスとデバイス基礎）間で積極的に推進したことが評価される。

- ・液体ヘリウム問題から研究停滞する可能性もある中、新しい現象やメカニズムの超伝導があり、予想外の成果が出たと言える。
- ・基礎研究（サブテーマ1～3）については世界レベルの成果が挙げられている。
- ・NIMS は高い物質科学研究レベルにあり、物質科学をいかに展開させるかの道作りに対する社会の期待は大きい。
- ・定年制研究職員ひとりあたり20件を超す論文発表は、成果の出し方として大いに評価したい。
- ・常に大ブレイクスルーの気配が漂う課題であり、計画的な取り組みが必ずしも良い結果につながらないが、この5年間はこのマネジメント体制で一定以上の成果に至ったと思われる。

「⑱ナノエレクトロニクスのための新材料・新機能の創製」：

- ・半導体産業界の技術先導の役割を果たすべく、産業技術を補完する国研の材料・ナノ解析技術にフォーカスしたアプローチと目標設定は評価できる。
- ・目標だけでなく新しい現象、high-k化におけるオリジナルで提案を行うなど、この分野においてNIMSの存在感は増している。
- ・新物質から実用化までには多くの研究が必要であるが、新物質開発というNIMSの最大目的のレベルは達成されている。
- ・日本の半導体メーカーが元気がないので、産業界との連携を強めて半導体産業の活性化にもより一層貢献してほしい。
- ・NIMSは材料開発からデバイスまで研究できる貴重な研究機関であり、この立場を活かしてナノエレクトロニクス分野で先端的な研究を続けてもらいたい。

「⑲ワイドバンドギャップ光・電子材料の研究開発」：

- ・材料をベースとした多彩な機能創出を目指した計画で、実際に基礎的な材料特性を生かしていく体制・姿勢ができており、NIMSのカラーが現れたプロジェクトである。
- ・光アイソレータの実用化まで達成したことはすばらしい。
- ・当初の計画外であるが、光アイソレータ実用化開発やグラフェン研究用ヘキサゴナルBNの開発等、特筆できる成果も出ている。
- ・バンドギャップの広さを活用した素子動作原理の構築に向けて期待したい。
- ・連携研究・共同研究先への貢献を含めた論文件数725件、特に蛍光体組成を主体とした特許登録総数280件は技術の資産化の観点で評価できる。
- ・競合技術が多い分野であり、基礎的な成果のなかから他技術を差別化できるものを選択し、効率的かつ継続的に発展させてほしい。

「⑳省エネ磁性材料の研究開発」：

- ・高度なナノ組織解析技術と理論追求の両輪に強力にサポートされた磁性材料及び機能デバイス開発体制・研究戦略を遂行しており、材料物性に基礎を置く研究開発の規範たりうる。
- ・高保持力磁石、磁気記録など新しく注目される成果が得られている。
- ・CPP-GMR（膜垂直通電型巨大磁気抵抗）で室温82%（低温280%）のMR（磁気抵抗）はすばらしい。
- ・Dyを含まない高性能NdFeB磁石として世界最高レベルのエネルギー積を達成し、今後のモーター高性能化の展開が期待できる。
- ・またホイスラー合金CPP-GMR素子として世界最高のMR比を達成した。
- ・磁性材料は競合物質技術が多いなか、優位に差別化できる複数の技術開発が可能な成果が挙げられている。

- ・磁性材料・スピントロニクスはきわめて重要な分野であり、本グループは材料を中心にこの分野の発展に大きく貢献している。

Ⅲ. 事後評価結果を受けての対応

事後評価報告書は、プロジェクトの全体像が分かるように、前半にプロジェクト責任者記入部分（研究目的と意義、研究内容、ミッションステートメント（具体的な達成目標）、平成24年度～平成27年度の事後評価時までの主な研究成果（アウトプット）及び研究成果から生み出された（生み出される）効果・効用（アウトカム）、波及効果（インパクト）、事後評価時の目標の達成度合い及び自己点検・評価）を加え、後半に評価コメントが来る構成にした。事後評価報告書は、理事長、研究担当理事、企画部門経営戦略室長に報告され、第四期中長期計画研究プロジェクトの計画の見直しや研究推進に活用された。

NIMS 公式ホームページの「[第三期中長期計画プロジェクト評価報告書詳細](#)」には、20プロジェクトの事後評価報告書が掲載された。